

「記・紀」により、封印された邪馬台国と葬られた出雲の国が、今蘇える

全④-2

社会医療法人 緑泉会米盛病院
「邪馬台国 in 南九州」を探究する会 会長

濱田 博文

「魏志倭人伝」（以下、「倭人伝」と略す）
【 】は「倭人伝」の読み下し文、（ ）
は著者の注記。

■ 5. 女王の都する所

「倭人伝」【女王の都する所、水行十日陸行一月】の水行から陸行に代わる地点を、出水にして八代としなかった理由は、八代→球磨川→人吉盆地地域は、紀元前 50 年頃から、次に述べる狗奴国（球磨国＝琉球国）の飛び地で、もともと邪馬台国とはソリが合わず、最終的には抗争にまで発展したからである。

「倭人伝」【女王国より以北は、その戸数、

道理を略載得べきも（女王国より北の地域は、普段交流があるので、前述のように行程を簡略に書けたが）、其の余の旁国（本州・四国）は遠く絶へ詳らかに得べからず（良く書けない）】。

■ 6. 薩南諸島と琉球列島

「倭人伝」【次に斯馬国（種子島）有り。次に己百支国（屋久島）有り。（～中略～）。次に奴国（与論島）有り（合計 21 ヲ国）。此れ女王の境界の尽くる所なり】。

合計 21 ヲ国は、現在の行政区画とも一致している奄美群島を含む薩南諸島の島々である（図 10）。



（図 10）女王の境界の尽くる所＝奄美群島（与論島）

北は対馬（正確には朝鮮半島の南端，狗邪韓国＜加羅＝任那＞）から南は奄美群島まで、一気に倭国の地理を記述して、【此れ女王の境界の尽くる所（奴国＝与論島）なり】と結んでいる。そこは現在も鹿児島県の南境界（与論島）である。もっとも、この薩南諸島 21 ヲ国は当時でも、中国の江南地域と盛んに交流していたので、かなり細かい知識があったものと思われる。

「倭人伝」【其（奄美群島）の南に狗奴国（＝球磨国；琉球列島）有り。男子を王と為す】（図 11）。

狗奴国（＝球磨国；琉球国）は民俗学的に奄美群島と同じ琉球族である。日本列島の、いわゆる大和民族とは異なる。その琉球族が紀元前 50 年頃から、前述の八代➡球磨川➡人吉盆地地域に移住して来て、いわゆるコロニーを形成して、隣接する邪馬台国とは反目し合っていた事は既述した。



（図 11）【其（奄美群島）の南に狗奴国（球磨国）有り】

「倭人伝」【其の官，狗古智卑狗有り。女王に属さず】。

そ（本国）の狗奴国は狗古智卑狗という王が在り，女王国には属していない。ただ，中国大陸の江南（図 10 参照）を中心とする東海岸地域とは、普段から狗奴国（琉

球）と交流も多かったので，狗奴国（琉球）に関する書きぶりは，以下，微に入り細を穿^{うが}って精彩を放っている。

「倭人伝」【郡より女王の国に至る，万二千余里】

この文章中の郡は，此の誤写と思われる。奄美列島の後，琉球の説明中に，突然帶方郡を意味する郡という何の関係もない異質の文字が入り込んできて脈絡がなくなるので，郡は此の誤写と思われる。此（琉球）より女王の国（邪馬台国の都・西都）までの距離は，対馬➡壱岐間の千里のちょうど 12 倍，即ち，万二千余里である。

「倭人伝」【男子は大小なく，皆鯨面文身，古より以来，其の使中国^{いた}に詣る。（中略）断髪文身，以って蛟竜^{ハブ}の害を避く。今倭の水人（漁師），好んで沈没^{ぎょこう}して魚蛤^{ぎょこう}を捕らう。文身は亦以って大魚・水禽^{サメ}を厭う。（後略）】

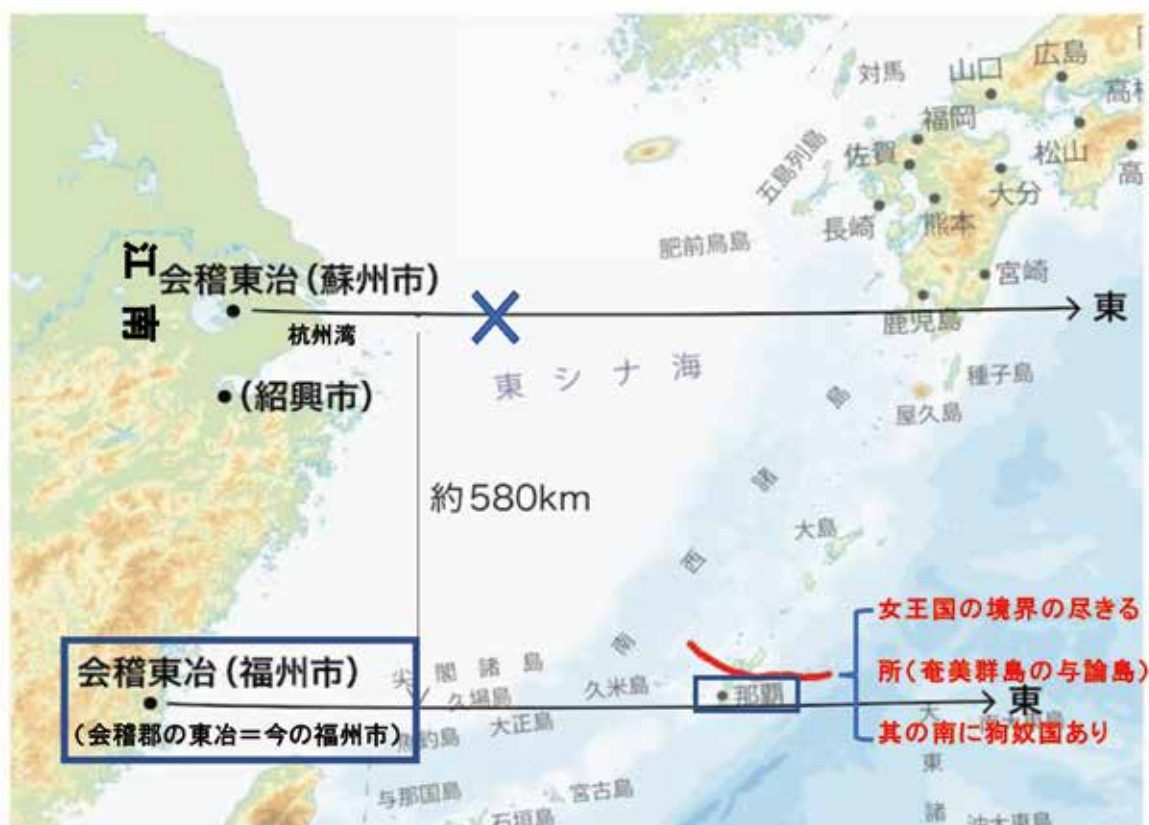
やはり，熟知している琉球の風俗は生き生きと描かれている。ハブ除けに顔に彫り物をしたとか，サメ除けに身体に彫り物をしたようなことは，九州・本州の歴史にはない（他の意味，例えば帰属連帯感，成人への通過儀礼，悪霊除けのための鯨面文身はある）。

また，その後に【牛馬がない】と書いているが，九州や本州にはいた。日向の古墳から馬具（特に金銅製は国宝）が出土し，牧場の跡が宮崎県の跡江遺跡から発掘されているが，馬具も牧場も全国規模に及んでいる。日本書紀には，推古天皇が蘇我馬子へ「馬ならば有名な日向の馬，太刀ならば有名な呉国の真刀だ」と言ったと記録がある。だから，【牛馬がない】のは琉球の説明である。

「倭人伝」【其（＝狗奴国）の道理を計るに，当に会稽東冶の東に在り】（図 12）。

狗奴国は，丁度，（東海岸の）会稽東冶（東冶ではない！）の真東に在る。

「倭人伝」の地理・行程の説明は，ここで終わる。



katana04.blog.fc2.com/blogを改変して引用 ※地理院地図をもとに作成

(図12)「倭人伝」【其(狗奴国)の道理を計るに、当に会稽東治の東に在り】

「倭人伝」では、ここ(琉球国)まで倭国関連の地理を述べているのだから、邪馬台国の所在地を比定する場合、まずここまでの全体的地理・行程に合理性があつて、かつ「邪馬台国」の比定地として、他の国々や後述する風俗などと整合性があるかどうかを検証することが最も肝要である。即ち、全体と細部の整合性がある事が必要である。多くの本はそれがなされずに、自分の行程・地理説に都合よく邪馬台国を推定して事足り、としている著者が多いように思われる。

7. 日本国の始まり

(AD142年頃、出雲の木次事件)

出雲国・沼田郷の素戔鳴が、142年頃、出雲随一の豪族ヤマタノオロチを倒した時(木次事件)が日本国の始まりと言えよう。

今から縷々述べていくが、日本建国の祖は、歴史的には素戔鳴である。但し、「記・紀」神話においては、素戔鳴の出自からし

て全く異なる！(出自から素戔鳴の造作が始まっている)

日本列島の弥生時代は、水の湧き出る盆地や台地を貫流する小川の傍に集落が出来て、そこに長がいるという形で、全国(特に西日本)に点として存在していた。その点を次々に束ねて面にしていった最初の人物が、出雲の国の素戔鳴であった。本名は蒙古・満州系名の布都斯で、祖先からの習わしであった(図13)。

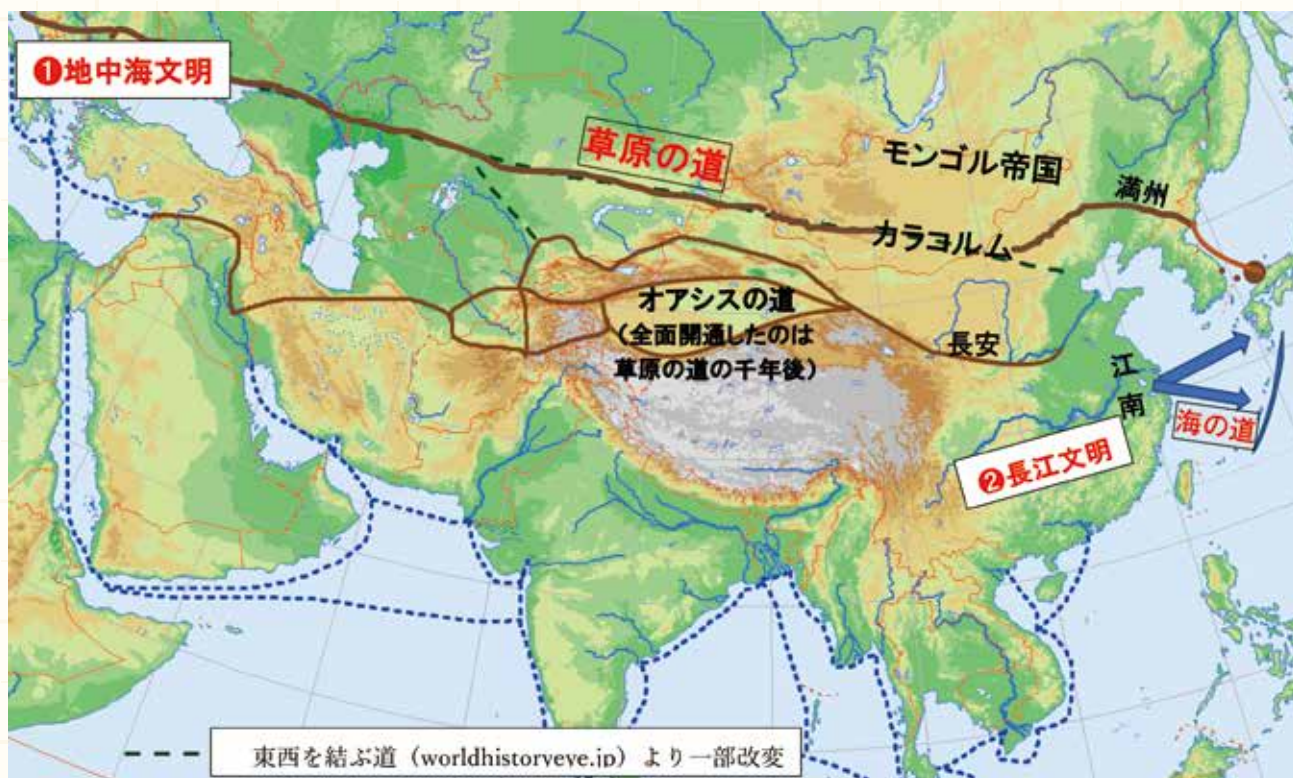


(図13) 古代(弥生時代後期)の西日本

■ 8. 縄文後期～弥生早期の東西交易路

さて日本列島は四面を海で囲まれている。従って文明が発達するためには、どこか先進国と交流がないと文明は伝わってこ

ない。狩猟・漁労や採集生活を基本としていた縄文時代後期頃から、日本列島が先進国と交流があったのは、次の二つの経路であった（図14）。



（図14）縄文後期～弥生早期の東西交易路：（1）地中海文明の草原の道と（2）長江文明の海の道
（オアシスの道＝シルクロードが全面開通したのは漢の武帝の時で、草原の道より、千年後である）

（1）草原の道（地中海⇄蒙古⇄満州⇄出雲）と呼ばれたモンゴル⇄カザフ⇄南ロシア草原を経由する古代の地中海との交易路がある。牧畜、畑作、毛皮、絹、鉄器、楽器、宝石（玉、ラピスラズリなど）、政治などが、蒙古・満州→出雲に伝わってきた。シルクロード（オアシスの道）は漢の武帝の時に全面開通し、草原の道より千年以上も遅かった。

（2）長江文明。中国・江南の寧波⇄舟山群島⇄吐噶（トカラ列島）⇄南九州，または江南から直接⇄南九州へ，あるいは琉球列島や奄美列島を介して南九州へ。長江文明の水田稲作、養蚕・絹織物、鉄器、政治、宗教（原神道）などが伝わってきた。

以上二つのルートの窓口の出雲と南九州に各々、いわゆる北方，南方モンゴリアン文明が伝わってきて、一種の文明開化（早

期弥生時代）が起きていた。

ところで、ここで朝鮮半島経由の文明はどうだったのか、という事について触れる。

古代史の書物には、朝鮮半島経由の文明が強調して書かれているが、それは最初の文明が日本列島に伝わってきた時代より遅い時代で、また意外に期間も短く、分量もそう多くはない。

朝鮮半島には韓民族がいたが（④-1：図1参照）、「倭人伝」にもあるごとく倭国より統一が遅く（馬韓，辰韓，弁韓，そして狗邪韓国と分立），必ずしも早くから中国文明を吸収していなかった。また北方の北朝鮮から南満州地域は中国の漢民族とは異なる他の異民族が跋扈し，戦闘状態だったので，中国の文化が陸続きには入って来なかった。従って，既述の草原の道も朝鮮

半島経由ではなく、蒙古➡満州から朝鮮半島東岸の沿岸航行で、直接、出雲に流入して出雲王国の早い文明開化を促した。（その満州から朝鮮半島東岸の沿岸航行を介する出雲ルートは、後の奈良時代には渤海国^{ぼっかいこく}と出雲を始めとする裏日本との正式な交易が活発に行われた記録と符合する。）

BC100 年前後、前漢の武帝がシルクロードを支配した頃から北東アジア全体の交流が活発になり、朝鮮を経由した中国文明（水田稲作、鉄器、養蚕・絹織物、甕棺墓制など）が筑紫の国に伝わった。AD57 年には筑前の奴国が金印「漢委奴国」を授与されたが、本格的には応神天皇の 380 年頃から遣隋使派遣前（600 年）の約 200 年間で短い。660 年の百済の滅亡により、王族・官人や職工人渡来が相次いだ。

「倭人伝」の頃の朝鮮半島諸国は国家・政治的にまだ未成熟で、倭国は朝鮮半島諸国より少し文明が進んでいる、と身びいきではなく、そう書かれている。

■ 9. 素戔嗚の北陸地方への侵攻

本次事件後、素戔嗚（35 歳頃）は名だたる美女（稲田姫）と鉄の鉾山（たたら製鉄➡玉鋼）を手中にして、出雲を始めとす

る山陰・北陸地方では、頭領と仰がれる。

素戔嗚が 40 歳頃、山口や北陸の越前、加賀、能登へ侵攻。同時に出雲特有の銅鐸信仰や墓制の方墳も持ち込まれた（図 15）。



（図 15）出雲王朝の銅鐸信仰（上）と四隅突出型方墳（下）

（全④-3 へ続く）

引用文献

全④-1 に掲載済みで、全 4 回シリーズで完結する予定です。

また本稿は、鹿児島史談会 2022 年 11 月例会で著者が行った講演を、一部改変・編集し直したものです。